

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月11日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730618

研究課題名（和文） 教員養成カリキュラムの「理論と実践の統合」に関する史的研究

研究課題名（英文） A Historical Study of Teacher Training System from the Viewpoint of the Integration between Theory and Practice

研究代表者

藤井 基貴（FUJII MOTOKI）

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：80512532

研究成果の概要（和文）：

本研究は「理論と実践の統合」の視点から、ドイツにおける教員養成制度の歴史と現代的課題の解明を目指すものである。研究の成果として、(1) 18世紀ドイツの大学における教員養成の制度化において哲学（哲学部・哲学者）による基礎づけがあったことが解明されるとともに、(2) その影響作用史を分析することの重要性が確認された。(3) また、具体的なカリキュラム開発および授業開発を通して、理論と実践を統合するための教育プログラムのモデルを提案した。

研究成果の概要（英文）：

This study traces the history of teacher training system in Germany from the viewpoint of the integration between theory and practice. It has produced the following results: (1) German University has introduced the teacher training system in 18<sup>th</sup> century and it was established and influenced by philosophers and the department of philosophy. (2) This research has also clarified the importance of the acceptance of German educational thought and its influence in Japan. (3) This study suggests educational programs and lesson plans based on the idea of the integration between theory and practice.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育史

キーワード：近代ドイツ、教員養成史、カント、哲学、教育学、授業開発

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、先進諸国では教育の質をいかに保証するかが政策上の課題となっており、その一環として教員養成制度の見直しが進められている。なかでも、いち早く改革を進めて

きたイギリスでは教員養成課程において教養科目を大幅に削減し、「現場での実践」(school-based)を重視する政策がとられており、教員養成課程の「脱理論化」が進められている。

(2)教員の実践的な指導力の向上によって学校教育の改善を図ろうとする英米圏の改革モデルについては、近年、国内外の研究者から「教師の専門性」を実践的スキルに還元しすぎているのではないかと、授業実践と理論研究との連携回路を断絶させているのではないかと、といった懸念が示され始めている。

(3)これに対して、ドイツではいまなお哲学部の伝統に基づく教養教育を重視した教員養成モデルが影響力を持っており、大学でのアカデミックな学修期間と実践的訓練（試補制度）期間との区分が堅持されている。そこでは、教員が実践を反省するための思考力を養成すること、授業実践における課題が原理の問題にフィードバックされることが重視されている。

(4)しかしながら、ドイツの教員養成制度の形成過程および現在の状況に関する研究は手薄な状況にある。本研究は、近代以降のドイツの教員養成制度を歴史的な視点から検証することによって、現代の教員養成制度の改革における「理論と実践の統合」をめぐる議論に対して、英米圏のモデルとは異なる参照軸を提供することを目指している。

## 2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、「理論と実践の統合」を高める教員養成システム構築のために、英米圏の改革モデルとは異なる改革モデルを有するドイツに注目し、その特徴を歴史的・思想的な視点から分析することによって、ドイツの到達点と課題を明らかにし、現在すすめられている日本の教員養成改革を評価・改善するための批判的視座を獲得することにある。

(2)具体的な研究課題は以下の三点となる。

- ①ドイツの教員養成史において「理論と実践の統合」の問題がどのように議論され、制度として実現してきたのかを解明すること。また、それが日本の教育学の学説史に対して、どのような影響をもたらしたのかを検討すること。そのために18世紀ドイツの大学史にさかのぼり、当時の哲学者たちの教育論およびその影響作用史を分析
- ②高等教育制度の再編がすすめられている現代ヨーロッパのなかで、ドイツの教員養成制度が持つ特徴、意義、課題を明らかにすること。
- ③上記の成果をもとに、日本の教員養成制度および教育現場の課題について検討するとともに、「理論と実践の統合」を目指した教育プログラム開発（カリキュラム開発、

授業開発）を進めること。

## 3. 研究の方法

### (1) 史・資料調査・分析

ドイツおよび日本において、史資料の発掘、収集、分析を行う。ドイツではベルリンの文書館（GStAPK）、国立ドイツ図書館、ドイツ教育学会教育史図書館、州立図書館、大学附属図書館等での史・資料調査を行い、それらの分析を進めることによって史実の解明を行う。

### (2) インタビュー調査

現在進められているEUの高等教育改革からドイツの教員養成制度がどのような影響を受けているのかをドイツの大学関係者にインタビュー調査を行う。本研究においてはドイツのベルリン自由大学、ハンブルク大学、ボン大学、フンボルト財団において研究調査を行う。

### (3) 教育プログラムの開発および検証

「理論と実践の統合」という観点から具体的な教育プログラムの開発を進める。本研究は当初、教員養成制度についてのカリキュラム研究を遂行する予定であったが、より具体的なテーマに即して研究を進めるために、教員養成課程における学生との授業開発を分析の素材とした。

## 4. 研究成果

### (1) 近代ドイツにおける教員養成制度

ドイツ教員養成史の研究は、主として19世紀にはじまる資格制度の成立過程と関連づけられて議論がなされてきた。19世紀初頭の国家試験制度の設立によって、ドイツの教員は聖職者との明確な区分が設けられたのであるが、その区分の前提として、それまでにどのような思想的・歴史的経緯があったのかについて不明な点が少なくない。そのため何故ドイツが英米圏の改革と一線を画しているのかについて史実に基づいた原理的な解明が困難な状況にあった。

本研究では18世紀ドイツの大学で開始された哲学部における教員養成制度の成立過程に注目し、その史的分析を行った。具体的には、カント「教育学」の講義記録および大学文書の分析を行い、18世紀後半に教員養成のパラダイムが「神学的教授学」から「啓蒙主義的人間学」へと転換したこと、さらに、そこで哲学（哲学部・哲学者）が改革に大きな貢献を果たしたことを明らかにした。

また、同時代の教育書と医学書とを比較分析することを通じて、近代教育学の成立過程と医学との連関関係についても分析を進めている。

## (2) カント「教育学」の日本における受容

日本においてカント哲学は新カント派を経由して受容された。教育学においてはヘルバルトやデューイよりも後に新カント派の影響下でカントが受容されることとなった。

戦後教育学において重視された「人間性の完成」、「人格の完成」、「発達概念」といった諸概念の形成過程が、このような受容史とどのように関連付けられるかを問うことは教育学におけるカントの位置づけを見通す上でも重要な論点となる。

そこで『教育学』への解釈学的分析の手がかりとして、訳語の変遷からカント教育思想の影響作用史を考察しようとする研究を進めるとともに、世界各国で翻訳されてきた『教育学』の受容史とその特徴について国際比較的分析を加えた。

これらの成果については論文および国際学会での発表を通して成果を報告を行った。

## (2) インタビュー調査の成果

ハンブルク大学高等教育センターおよびベルリン自由大学にて教員養成制度の改革についてインタビュー調査を行った。ヨーロッパ全体で進められている高等教育改革との影響関係について論じるには、サンプル数および情報が限られているため、引き続き継続して分析を行っている。成果については近年中に論文化する予定である。

## (3) 教育現場の課題についての分析

日本の学校教育における今日的課題を分析を進めた。具体的には、教育改革の動向をオルタナティブ・スクールの実践と比較検討を行い、中部教育学会において「21世紀の公教育」と題した公開シンポジウムを企画開催して、意見交換を行った。

また、学校現場の実態把握のため質問紙調査を行った。その成果として大学院での長期履修経験の有無が学校現場でのカリキュラム改善に対して関心が高いことや、大学の教員養成課程において講義されている比較的新しい教育理論が学校現場ではまだ十分に普及していないことが明らかとなった。

## (4) 教育プログラムの開発および検証

「理論と実践の統合」を目指したカリキュラムおよび授業開発の実践として「ユースカレッジ」の実践および「道徳授業」での授業開発を行った。開発したカリキュラムおよび教材は学会発表や報告書によって公開した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①藤井基貴「カントにおける『教育学』/教育学に

おけるカント」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学編)』静岡大学教育学部編、2012年3月、105-114頁。

②藤井基貴、生澤繁樹「道徳教育の授業開発に関する実践的研究—郷土資料の開発とシティズンシップ教育の課題—」生澤繁樹との共著『静岡大学教育実践総合センター紀要』静岡大学教育学部附属実践センター編、18号、2012年3月。

③藤井基貴、高木宏康、加藤弘通「小学校教師の校内研修に対する認識」『静岡大学教育実践総合センター紀要』静岡大学教育学部附属実践センター編、18号、2012年3月。

④藤井基貴、加藤弘通「道徳教育の授業開発に関する基礎的研究(1)—モラルジレンマに関する実態調査から—」加藤弘通との共著『教育学部研究報告(人文・社会・自然科学編)』静岡大学教育学部編、2010年3月、237-243頁。

⑤藤井基貴「『特別シンポジウム—大学教育への問いとその将来を考える—』に参加して」『静岡大学教育学部FD活動報告書』静岡大学教育学部FD委員会、2010年3月、11-12頁。

⑥藤井基貴、高木宏康「校内研修の歴史と研究動向」『静岡大学教育実践総合センター紀要』静岡大学教育学部附属実践センター編、16号、2010年3月、93-103頁。

〔学会発表〕(計9件)

①藤井基貴、上地香杜、松永尚徳、「静岡大学における『防災道徳』教育の授業開発」大学教育改革フォーラム in 東海 2012、ポスターセッション、2012年3月3日、於名古屋大学

②藤井基貴「『防災道徳』教育の授業開発—その成果と課題—」平成23年度自然災害科学中部地区研究集会、2012年2月29日、於静岡県地震防災センター

③藤井基貴「18世紀ドイツにおける子育ての近代化—ファウスト『衛生問答』に注目して」教育史学会、2011年10月1日、於京都大学

④藤井基貴「21世紀の公教育—オルタナティブ・スクールとの対話—」(公開シンポジウム)、企画司会、中部教育学会、2011年6月25日、於静岡大学

⑤藤井基貴「デモクラティックスクールの可能性」(ラウンドテーブル)、企画司会、中部教育学会、2011年6月25日、於静岡大学

⑥藤井基貴、高木宏康「小学校教師の校内研修に対する認識」中部教育学会、2011年6月25日、於静岡大学

⑦Fuji Motoki, Izawa Shigeki, The Role of Teaching Philosophy in the Teacher Training Education, Seminar on Role of Philosophy, Shizuoka University, 14<sup>th</sup> March 2011

⑧藤井基貴、玉置雅野「『白川町ユースカレッジの取り組み』—中高生の夢を育てるノンフォー

「マル教育の展開と課題」日本学習社会学会、  
2010年11月7日、於三鷹市公会堂

- ⑨Fuji Motoki, Izawa Shigeki, Adachi Atsushi,  
The Acceptance of Western Educational  
Thought and its Influence in Japan : Immanuel  
Kant, John Dewey, and Helen Parkhurst, 33<sup>rd</sup>  
Annual Global Studies Conference, University  
of Nebraska at Omaha, 8<sup>th</sup> October 2010

〔図書〕(計4件)

- ①藤井基貴編著『道徳教育の授業開発Ⅱ—「防  
災道徳」授業の開発—』静岡大学教育学部、  
2012年3月、1-162頁。  
②藤井基貴編著『道徳教育の授業開発—郷土  
資料づくりからはじめる道徳授業—』静岡大  
学教育学部、2011年3月、1-95頁。  
③藤井基貴「カント『教育学』翻訳考」加藤詔士、  
吉川卓治編著『西洋世界と日本の近代化—  
教育文化交流史序説—』大学教育出版、  
2010年5月、2-21頁。  
④藤井基貴「オルタナティブ教育の可能性」五  
島敦子、関口知子編著『未来をひらく教育  
ESD —持続可能な多文化社会をめざして』  
明石書店、2010年2月、53-72頁。

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~emfujii>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤井 基貴 (FUJII MOTOKI)  
静岡大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80512532